創業65周年記念

家庭学習研究社 中学受験で光る功績

広島の教育者との縁 指導方針の礎に

中学受験に特化した「家庭学習研究社」(本部・広島市中区)は1967年の設立以来、広島県内に6校ある学び舎で2万人以上の小学生を教え、国公立・私立中高一貫校に送り出してきました。高い合格実績を誇るだけでなく、子どもたちの基礎学力を鍛えた上で中学進学後も役立つ学習方法についてもきめ細かく指導。保護者の信頼も厚い学習塾としての評価を積み上げてきました。今年は、創業者・坪内茂美が個人指導をスタートさせてから65年となります。広島の教育の中で成長した同社の歩みをひもときながら、根底を支えている教育の理念や方針などを紹介します。

創業者の歩みと塾の沿革

創業者である坪内茂美は1936年に、旧賀茂郡西条町(現・東広島市)にある兼業農家の次男として生まれました。西条中時代はプロ野球の選手を本気で夢見るほど野球に没頭し、3年生で生徒会長も務めるなど活発な少年でした。しかし、賀茂郡の野球大会で敗退。目標を失って無気力になってしまいました。担任で野球部顧問の先生が次の大きな目標を持たせようと、修道高(広島市中区)への受験を勧めてくれました。茂美は52年、先生の熱意に応えて合格。同高への進学が、茂美の勉強に対する姿勢や考え方を変えるきっかけとなりました。

正則学習館で学ぶ塾生たち

創業者・坪内茂美

最も影響を受けたのが、英語教師の佐々木昭先生でした。後に米国留学して静岡大の教授となり、全国英語教育学会の名誉会長も務めて瑞宝中綬章を受章された方です。日米両国が奨学金を支援するフルブライトでの米国留学を目指して勉強していた先生の自宅に、毎週日曜日に通って一緒に学んだおかげで、英語の成績がぐんと伸びてトップクラスの成績を取れるようになりました。恩師との心の交流が茂美を成長させたのです。

指導力高まり 正則学習館設立

茂美は修道高を卒業し、佐々木先生のように米国留学を目指して勉強していた58年、英語の成績が伸び悩んでいた中学1年の妹に勉強を教えることになりました。妹の同級生も集めて指導したところ、全員の英語力が向上して学校の成績もアップ。その評判が広まり、宣伝もしていないのに夏休みになると多くの子どもたちが茂美のところに集まってくるようになりました。

正則学習館の先生たち。後列中央が茂美

当時の西条町では小学校で広大附属中や私立中学を受験する子どもたちのための補習教室を実施していました。西条小で中学受験するのは、主に造り酒屋の子どもたちでした。しかし、公立校が中学受験のための指導をすることを禁止する通達が文部省(現・文部科学省)から出たために、同小の校長や保護者らが白羽の矢を立てたのが、寺子屋のようなスタイルで中学生を教えていた茂美でした。59年から中学受験の指導を引き受け、61年には4年生から教えていた生徒20人のうち19人が志望校に合格。それまで、小学校の補習授業では5人程度の合格者しか出せていなかったため、保護者たちが大喜びし、茂美の評判はさらに高まりました。

口コミで生徒が集まるようになり、「正則学習館」という学習塾を西条町で同年、正式に始めることになりました。教室を営林署(現・森林管理署)の事務所内に作り、中学受験をする小学生だけでなく中学生も含め数百人の生徒が通うようになりました。元教員ら数人も講師として参加しました。

広島市内に進出 日曜テストも実施

正則学習館を開校してまもなく、茂美は広島大附属小の磯部唯之先生を紹介されました。磯部先生は算数の教科書の編さん委員で、小学生の参考書「自由自在」の執筆者でもありました。茂美は多忙な磯部先生の頼みで、自由自在を執筆する先生の補佐役も引き受けました。また、磯部先生からは中学受験で役立つ指導のノウハウも学び、同小の先生たちとの交流も生まれました。

深い信頼関係で結ばれた磯部先生の励ましもあり、茂美は67年、広島市内に進出。「家庭学習研究社」に名称を改め、広島市中区に設立しました。その後も磯部先生や同小の先生たちとの交流は続きました。会員専用のオリジナルテキスト「マナビー」は、当時の同小の先生たちが監修してくれた教材がベースになっています。

日曜テストに集まった子どもたち

家庭学習研究社がスタートしてまもなく、崇徳中(西区)の教頭先生が同社を訪問しました。生徒募集のちらしを見て共感した教頭先生は、67年に西区大芝へ移転したばかりの崇徳中に思ったほど生徒が集まらないため、茂美に知恵を借りようと訪れたのです。茂美は、毎週日曜日に崇徳中の校舎で、集まった小学生にテストを実施し、テストの間に保護者を対象とした家庭学習研究社と崇徳中の説明会を開いてはどうかと提案しました。それが、「日曜テスト教室」の始まりとなり、隔週土曜日にテストをする現在の「マナビーテスト」の原型となりました。日曜テスト教室には千人規模の小学生が集まるようになり、崇徳中にも毎年500人以上の志願者が集まるようになりました。

人との出会いや縁に恵まれながら、設立当初は小学6年部のみでスタートした塾は保護者と多くの小学生の共感に支えられて拡大していき、76年には5年部、85年には4年部を新設して、3年間での受験指導体制を整えていきました。生徒の増加とともに教室も増え、76年以降は三篠校(西区)、呉校(呉市)、己斐校(西区)、東広島校(東広島市)、広島校(東区)、五日市校(佐伯区)の各校舎が次々と開校。常時、千人以上の児童が通う塾に成長しました。また、新型コロナウイルスの感染が拡大した2020年には、オンラインコースも新設。現在では海外や県外の児童も含め100人以上が受講しています。

戦後まもない広島で、「学習塾」という新しい教育サービスを提供し、子どもたちの学びの場をつくった茂美。受験合格を目標としながらも、子どもたちに寄り添って基礎学力を向上させながら勉強の楽しさを指導してきました。創業時の正則学習館から関わった多くの社員や講師の試行錯誤が、今日の家庭学習研究社を形づくっています。

正則学習館の正門。明治時代に建てられた営林署で授業をした

指導方針や教材の特長

家庭学習研究社は中学受験の対策を主眼としながらも、受験のテクニックを指導して「志望校に絶対合格させる」ことを1番の目標に掲げているわけではありません。小学校課程で習得しなくてはならない基礎学力の定着を徹底させること、さらには中学進学後も欠かせない学習習慣や学習方法を身に付けさせることを大切にして、指導しています。

同社の受験対策期間は4、5、6年部と3年間あり、入試で要求される応用的学力の土台となる基礎学力を養う期間を十分に確保した上で、本格的な受験体制へと進んでいきます。ゆとりある受験対策期間は子どもの負担を軽減し、無理のない勉強で合格に導きます。

中学受験の対策のための学習には、子どもの知的好奇心を刺激し、夢中になって取り組める課題がたくさんあります。授業を通して自分で考え、解決することの喜びを繰り返し味わうことで、先々の学力開花に向けた後押しをしています。また、授業の受け方や家庭学習の進め方など「自律的に学ぶ姿勢」を培うための指導にも力を注いでいます。

模擬試験の様子(修道中)

同社には、広島の中学入試を知り尽くした教材制作専門の部署があります。広島の入試に的を絞ったテキストやカリキュラムは、子どもたちを無用の負担から解放し、地に足の着いた堅実な受験生活を可能にしています。

会員専用テキスト「マナビー」

同社の目指す学習指導を推進する上で欠かせないのが、会員専用テキスト「マナビー」です。50年以上にわたる広島の中学受験指導の経験で得た蓄積・ノウハウを基に、専門のスタッフが作成しています。無理・無駄なく計画的に進められるよう、保護者にとっても「何を、いつ、どれだけ学習するのか」が一目でわかるよう工夫されたテキストです。また、記述力も備わるように配慮しています。マナビーでしっかり学習していけば、国立・私立中の入試はもちろん、公立一貫校の適性検査にも対応できる学力が身に付きます。

会員専用テキスト「マナビー」

土曜日の「マナビーテスト」

会員専用テキストと並んで、同社の学習指導を支える中心的存在が、隔週土曜日に実施する「マナビーテスト」。このテストは、「予習→授業→復習」のリズムを身に付けながら、その2週間でどれだけ学力を定着できたかを測るもので、全会員が一斉に実力を競い合います。採点後の答案は、科目別順位や総合順位などの成績データとしてまとめ、個別に返却します。

教科専任の指導担当者

同社の指導担当者は全て教科専任であり、小学生の受験対策に的を絞って研究している専門家の集団です。また、彼らを束ねてどんな授業をするべきか周知徹底を図り、子どもたちが自ら主体となって学ぶ姿勢や習慣を身に付けるための支援体制を作るのが、各校舎の責任者です。

広島の教育と中高一貫校

広島県は全国7位の大学進学率55・2%(2020年度学校基本調査)で、国立・私立の中高一貫校が数多くある教育先進都市としての地位を確立しています。それは、明治以降の軍都としての「廣島」と、世界で唯一の被爆国としての「ヒロシマ」の歴史の中で、人材を育成するための教育機関が次々と創設されたからだといえるでしょう。

浅野藩の藩校として生まれ、300年近い歴史を誇る修道(中区)、西の中等教育の中心として1905年に開校した広島大附属(南区)、1886年から女子教育を続ける広島女学院(中区)、1915年の大正時代から続く安田女子(同)があります。また、原爆で廃墟となった戦後は、「広島を教育で励ましたい」とカトリック系のノートルダム清心(西区)と広島学院(同)が設立されました。全ての中高一貫校の始まりは、広島の歴史を反映しています。

代表あいさつ

未来を見据えた教育目指す

代表取締役 坪内 茂

家庭学習研究社は、広島の教育者との歴史の中で生まれました。基礎教育を重視して自主自学という教育理念の下、自主的に目標を決めて勉強する習慣を身に付けた生徒を数多く送り出しています。

広島県の教育市場を熟知した当社では、生徒に寄り添った教育の在り方を模索してきました。合格実績は、生徒が勝ち取った結果であり、我々だけの努力で成り立つものではありません。そして、受験はあくまでも目的のための手段です。これからの長い人生を考えると、小学生という時期は人生の素地を身に付ける最も大事な時期です。小学生の時に身に付けた学習習慣は、論理的な思考や読解力、あらゆる分野の知識や応用力の基礎になります。

これからの時代は今まで以上に社会の変化が激しく、資源のないわが国に生まれた者にとって、グローバル化は避けて通れないでしょう。交通手段の簡便化や通信手段の多様化は、企業から個人のものに移っています。子どもたちが大人になる2035年以降は、今とは全く違う社会や価値基準に変化していることが考えられます。

重要なのは、子どもたちが主体的に自分の運命を切り開いていくことができること。そして、どの分野であれ、どんなに困難でも「やり抜く」ことです。中学受験の勉強を通して、将来を見据えた実験的な学びの場を提供し、サポートすることがこれからの当社の役割だと思っています。

グローバル社会で通用するには、幼少期から自分の生まれ育った土地をしっかり理解していることが大切です。幸い広島という土地柄は、歴史的にも風土としても豊かです。世界的にも特別な意味を持つエリアといえるでしょう。その中に、次の時代をつくるために生かせる先人の知恵や努力も多くあります。

また、全国にユニークな先輩がたくさんいます。その人たちの経験や知識もこれからの人生の資産になることでしょう。当社は地元広島に根差しながら、先進的な視点から未来を見据えた教育の場を提供することを目標に、新たな取り組みに挑戦していくつもりです。

卒塾生から

漫画家 コンテくん

【profile】広島市出身の30代。修道中・高から早稲田大に進学。卒業後はCMプランナーの仕事をしながら、漫画家としても活躍。修道時代の経験を基にした「男子校の生態」が2023年の広島本大賞コミック部門に選出された。

塾の授業で知識欲旺盛に

家庭学習研究社の三篠校に通い始めたのは、5年生からです。親に勧められたわけではなく、中学受験をする友達に誘われたのがきっかけです。

楽勝気分で受けた最初の入塾テストでは、落ちてしまいました。だけど、僕は「自分より頭のいい人がいっぱいいるんだ」と新鮮な気持ちになって、わくわくしました。2度目で合格し、塾通いを始めました。

算数の先生は、授業後に居残って解くプリントの採点をいつもしてくれて、全問正解するまで根気よく付き合ってくださいました。理科の先生は駄じゃれを絡めて星の名前などを教えてくれたので、今でも記憶に残っています。勉強以外のことも学びました。国語の先生が「残像に口紅を」(筒井康隆著)という本を紹介してくださり、10年前にふと思い出して文庫を購入し、読んだこともあります。先生たちは、僕の知識欲をかき立ててくれる存在。テストの成績によってクラス替えがあるシステムも、のほほんとしていた僕を追い込み、刺激してくれる材料になっていたんでしょうね。これまでの人生で一番勉強したのが、中学受験の時だったかもしれません。

僕の両親は「受験に失敗したら公立に行けばいいよね」というタイプだったので、プレッシャーなど感じたこともありませんでした。勉強ができて面白い友達がいる塾が、僕にとって「もう一つの小学校」のような楽しい居場所。そういった環境を提供してくれた塾の先生や両親に感謝ですね。

男子校の生態
コンテくん 著
KADOKAWA
1210円(税込)
男子だらけの世界も、悪くない。男子校に6年間通っていたコンテくんの日常を、ゆるっと描いたエッセイ漫画。

企画・制作／中国新聞社 地域ビジネス局